

本文（十六夜日記）

（小学館『新編日本古典文学全集』による）

又一の宮といふ社を過ぐとて、

一の宮名さへなつかし二つなく三つなき法（のり）を守るなるべし

二十日、尾張国、下戸（おりと）といふ駅（うまや）を出でて行く。避（よ）きぬ道なれば熱田の宮へ詣りて、硯とり出でて書きつけ奉る歌、五つ。

祈るぞよ我が思ふことなるみがたかたひくしほも神のまにまに
鳴海瀉和歌の浦風隔てずは同じ心に神もうくらむ
満（み）つ潮（しほ）のさしてぞ来つる鳴海瀉神やあはれと見るめたづねて
雨風も神の心にまかすらむ我がゆく先のさはりあらずな
契りあれや昔も夢にみしめ縄心にかけてめぐりあひぬる

潮干（しほひ）の程なれば、障（さは）りなく干瀉に行く。折しも浜千鳥いと多く先立ちて行くも、しるべがほなる心地して、

浜千鳥鳴きてぞ誘ふ世の中に跡とめむとは思はざりしを

隅田川のわたりにこそありと聞きしかど、都鳥といふ鳥の、嘴（はし）と脚（あし）と赤きは、この浦にもありけり。

言問はむ嘴と脚とはあかざりし我が来し方の都鳥かと

二村山を越えて行く。山も野もいと遠くて、日も暮れはてぬ。

はるばると二村山を行きすぎてなほ未たどる野辺の夕闇

「八橋にとどまらむ」と人々言ふ。暗さに橋も見えずなりぬ。

ささがにの蜘蛛手あやふき八橋を夕暮かけて渡りかねつる

二十一日、八橋を出でて行くに、いとよく晴れたり。山もと遠き原野を分け行く。昼つかたになりて、紅葉いと多き山に向かひて行く。風につれなき紅、ところどころ朽葉（くちば）に染めかへてける、常盤木（ときはぎ）どもも立ちまじりて、青地の錦を見る心地して。人に問へば宮路（みやち）の山とぞ。

時雨れけり染むる千入のはては又紅葉の錦色かへるまで

この山までは、昔見し心地する。頃さへ変わらねば、

待ちけりな昔も越えし宮路山同じ時雨のめぐりあふ世を

山の裾野に竹ある所に、萱屋ただ一つ見ゆる、いかにして、何のたよりに、かくて住むらむと見ゆ。

主や誰山の裾野に宿しめてあたりさびしき竹のひとむら

日は入りはてて、なほ物のあやめもわかぬほどに、わたうどとかやいふ所にとどまりぬ。

二十二日の暁、夜深き有明の影に出でて行く。いつよりも、物いと悲し。

住みわびて月の都は出でしかど憂き身離れぬ有明の影

とぞ思ひ続ける。供なる人、「有明の月さへ笠着たり」といふを聞きて、

旅人の同じ道にや出でつらむ笠うち着たる有明の月